

◆久松久子 選

私達滑稽俳人は、川柳のように季語が無く、又は景色だけの句でもなく、季語と笑いと思いの三調子が響き合って一句を成さなくてはならない。だから、こんな難しいことに挑戦しているのだと自負している。ただ、時々思うのは、面白味ばかりに囚われて、詩心から離れてしまうことがあるのではないかということである。

芭蕉は「三尺の童に倣え」と訓えて居られ、八木会長は天真爛漫であれと申される。子どものように素直に楽しく気楽に作ろうと思うが、上手に作ろうとする欲が出てしまうものである。

今回ご紹介したいのは、最近、上梓された、「百鳥」同人の藤森万里子さんの、句集『初鏡』の作品である。藤森さんは滑稽俳人ではなく一般の俳人で、ご本人は滑稽句になっているとは気付いていないかもしれないが、ほんの少しの隠し味の中に、詠む人の想像を拓けてくれ、可笑し味もある、余裕の滑稽俳句である。

仏具屋に紅白の幕秋しぐれ

仏具屋なら白黒の幕が当然と思うが、紅白では大売り出しかと思う。仏具は、流行がないから案外よろしい商売である。儲け過ぎると仏様の罰があたるかも。

竿燈の倒れくるたび身構へぬ

それはそれは長い竹竿を組み、巨大な団扇のような物に提灯を沢山付けて持ち上げたら、しなって倒れて来そうになり、担ぐ人間が小さく見える。それを担いで練り歩く秋田の七夕祭。動く度にしなって倒れて来そう。「身構へぬ」がこの句の眼目、つまり滑稽である。

初写真電池が切れてしまひけり

折角の最高の顔にポーズをとっても、そういう時に限って「電池が切れた。ごめん」。その時のがっかりした顔がクローズアップされて想像が広がる。

荒梅雨の京都五山を洗ひけり

雨が止んだ後の京都五山の青々とした姿を、雨が洗ったと解釈出来る詩心に滑稽がある。

新涼や和服の似合ふピアニスト

ピアニストは、おおよそドレスで演奏するが、和服で弾くと袖が邪魔になり、鍵盤の端から端まで使う曲は、襷掛けでないと無理かもと懸念してしまう。日本人ならではの発想。

ジーパン干す祇園小路や夕薄暑

細格子に三味線の音が聞えて来そうな花街通りにジーパンが干してある。舞妓さんも、お座敷のない時はジーパンスタイルで過ごすのだろうかと思われ意外性のある句。「夕薄暑」の季語が、提灯に赤い灯の入る前の花街の一景を上手く表現している。

金メダル首に掛けたる案山子かな

この金メダルは金紙で作ったのだろうが、案山子の晴れ姿である。昔乍らの鳴子では、この頃の雀は馬鹿にするのかも。また、案山子にも流行がある。

幼子に歳をきかるる初電話

おばあちゃんの電話に、孫が「おばあちゃん、いくつになったの」と、立場の逆転した可愛い質問。初笑いのひとコマ。

新装の店は古着屋山笑ふ

新装開店の店は、なんと古着屋だった。店が新しくても中味は古物ばかり。これも意外性のある滑稽句である。

◆日根野聖子 選 ～松井真資『カラスの放心』～

日向ぼこ婆の魂すこし抜け

つくつく法師恥の手紙を呑むポスト

鈍行の雲こそよけれ神の旅

窓に付く大蛾裏側全部見せ
本能という定型や鳥帰る
年寄りもすこし走りぬ年の暮
電子レンジ満タン男爵薯回す
玄関に立たされ捕虫網冬に入る
老いらくの恋敵いる日向ぼこ
投げ入れてあり大花瓶に蠅叩
君待ちて春の隣にいるごとし
混じり合う齡の臘季のおぼろ
己が足叱咤し慰撫し炎天行

著者の松井眞資氏は、一九三八年、神奈川県生まれ。五十歳の頃、天休翼主宰の「浮巢」に入会。現在、同人誌「花水木」「蜻蛉句帳」に所属し、俳人協会会員、滑稽俳句協会会員としてもご活躍。

理想の句集とは、「時代、年代に関係なく、この世を茫洋と漂う詩片の集合」であり、「俳句は窮極のところ、自分史から抜け出せない文芸」との、あとがきの言葉もいい。

小説にしる随筆にしる、文学は、愛や死や人間について、既に書き尽くされていることを、いかに自分独自の感性と視点で描き直してみせられるかにかかっている。俳句もまた同じと認識させられる。